

一九世紀前半のダルマチアにおける

イタリア・ナシヨナリズムの影響

石田 信一

要 旨

一九世紀を通じてダルマチアにおいて進展した国民統合過程との関連において、同時代のイタリアからの政治的・思想的影響、とりわけ統一国家形成をめざす運動、いわゆるリソルジメントが進展する中でイタリア・ナシヨナリズムの影響について考察した。従来、クロアチア国民統合過程の視点からクロアチアとダルマチアの影響関係については多くの論考がなされてきたが、イタリアとの関係についての論考はなお十分であり、本論はそうした事実に対する問題提起としての意味を持っている。

一九世紀前半、ダルマチアの知識人の多くはイタリア系、スラヴ系を問わずイタリア諸邦で高等教育を受け、イタリア語を日常的に用いており、イタリアから最新の思想的潮流を学んでいた。オーストリアの強権的支配に抗議する意味で、彼らの中にはカルボネリアや「青年イタリア」を通じて提起されつつあったイタリア・ナシヨナリズムに傾倒する者もあつた。しかし、多くの場合、彼らはリソルジメントを全面的に支持したわけではなかったし、ダルマチアを将来のイタリア統一国家の一部とは考えていなかった。一八四八年

革命に際して、自治体レベルでも個人レベルでもヴェネツィアを支持する文書がほとんど残されていないことは、その証左である。イタリア人と南スラヴ人は反オーストリア的立場で共闘する側面を持ち、領土的要求を含む「民族」的対立は顕在化していなかったが、ダルマチアの知識人、とくにスラヴ系知識人はリソルジメントの中からむしろ自らの南スラヴ人としての国民形成・国民統合を実現する手法を学んでいたのである。

はじめに

ダルマチアはバルカン半島の分水嶺であるディナル山脈とアドリア海の間広がる細長い帯状の地方であり、複雑に入り組んだ海岸線と多くの島嶼に囲まれ、古来港湾都市が発達してきた。アドリア海を隔ててイタリア半島と対面する地理的条件から、これらの都市はその起源においてラテン的（イタリア的）性格を持っていたが、七世紀前後にスラヴ人が内陸部を中心に大規模な移住を行なったことにより、ダルマチアは「イタリア人に縁取りされたスラヴ人の土地」⁽¹⁾となった。それ以来、中世・近世を経て少なくとも一九世紀に至るまで、海岸部⇨都市⇨イタリア文明、内陸部⇨農村⇨スラヴ文明という対照的な構図、いわば「二つのダルマチア」⁽²⁾とも呼ぶべき状況が続いてきた。現在、その大半はクロアチア共和国の領土となっており、住民の大多数はクロアチア人としての国民意識を持っているが、なおも海岸部の歴史的建造物や住民の生活習慣にかつてのイタリア文明の影響を伺うことができる。

本稿の目的は、一九世紀を通じてダルマチアにおいて進展した国民統

合過程との関連において、同時代のイタリアからの政治的・思想的影響、とりわけ統一国家形成をめざす運動、いわゆるリソルジメントが進展する中でイタリア・ナシヨナリズムの影響について考察することに⁽³⁾ある。従来、クロアチア国民統合過程の視点からクロアチアとダルマチアの影響関係については多くの論者がなされてきたが、イタリアとの関係についての論考はなお不十分であるように思われる。一九世紀のダルマチアの知識人の多くがイタリアに留学し、その政治的・思想的影響を直接的に受ける状況にあったことを考慮するならば、個別的な受容のあり方を含めて、その詳細な分析が当該地域の国民統合過程の理解には不可欠であろう。本稿では、一八四八年革命期に至る三〇年余りの時期を取り上げ、ダルマチアにおけるイタリア・ナシヨナリズムの影響について検討を加えたい。

一 基本的前提

一八世紀末から一九世紀初頭のいわゆるナポレオン戦争期に、それまで数世紀にわたってダルマチアを支配してきたヴェネツィア共和国と

ドゥプロヴニク共和国はともに滅亡し、フランス領「イリリア諸州」として再編された。しかし、ナポレオンの没落とともに同州は解体され、ウィーン会議の結果、オーストリアへの編入が正式に決定された。その行政機構が確定するのは一八二二年であるが、その際、旧ヴェネツィア領ダルマチア地方、旧ヴェネツィア領アルバニア地方（現在のモンテネグロ沿海地方）、旧ドゥプロヴニク共和国の領域がオーストリアの「州」（ラント）にあたる単一の行政単位「ダルマチア王国」を構成することとなった。名目上はオーストリア皇帝が「ダルマチア王」となったが、事実上の州政府としてダルマチア全域を統括したのは、ザダルに設置されたオーストリア政府直属の総督府であり、例外なく軍人（将軍）である総督が民政・軍政の全権を掌握した。なお、伝統的な身分制議会が自治の拠り所となっていたオーストリア国内の多くの「州」とは異なり、ダルマチア王国にはヴェネツィア時代からコミューン・レベル以上の議会は存在せず、あえて新設もされなかった。こうして、ダルマチアはヴェネツィア時代と同様に実質的な自治権を与えられることなく、オーストリアの中央集権的支配の対象となったのである。

それでは、この「ダルマチア王国」の住民の「民族」構成はどのようなものであっただろうか。ダルマチアに限らず、この時代の住民の「民族」構成に関しては信頼できる統計資料が欠如しており、なお議論の余地も大きい。一九世紀半ばの段階で四〇万人前後と推計される総人口のうち九〇%以上がスラヴ系住民（八割がカトリック教徒^{II}のちのクロアチア人、二割が正教徒^{II}のちのセルビア人）であり、イタリア系住民

は五%前後にすぎなかったと考えられる。⁽⁴⁾ イタリア系住民は海岸部の諸都市に集中しており、州都ザダルを含めて、コミューン単位では多数派を占める場合も少なくなかったが、⁽⁵⁾全体としてスラヴ系住民に比べれば圧倒的な少数派であったことは疑いようのない事実である。

それにもかかわらず、ダルマチアの公用語は基本的にイタリア語であり、公共の場でスラヴ語が用いられることは稀れであった。⁽⁶⁾それは、数世紀にわたるヴェネツィア支配の遺産でもあったが、何よりもスラヴ語が近代的な文章語として確立されていなかったこと、そしてスラヴ語を教授語とする中等・高等教育機関が決定的に不足していたことによる。

例えば、一八六一年の公式統計によれば、ダルマチアにはギムナジウムや実業学校を含む中等教育機関が八校あったが、フランススコ派が運営するシーニのギムナジウムを除けば、すべてイタリア語が教授語であった。また高等教育機関としてはカトリック系神学校が四校、正教系神学校が一校あったが、カトリック系神学校はすべてイタリア語を教授語としており、ザダルの正教系神学校だけがスラヴ語を教授語としていた。高等教育機関は神学校しかなく、しかもそれは大学レベルのものではなかったから、将来のエリートとなるべき社会階層の子弟は、実際には必ず外国に留学し、高等教育を受けることになった。同じオーストリアの支配下にあったヴェネツィア州のパドヴァ大学に、多くの留学生が学んだ。

こうした教育制度の関係もあって、ダルマチアの知識人層の多くは「母語」のいかに問わずイタリア語を日常の言語としており、また二

言語を併用する場合でも、通常はイタリア語のほうが堪能であった。ダルマチアはラテン語およびスラヴ語で書かれたルネサンス期の古典文学作品に代表される文化的伝統を誇っていたが、一九世紀前半の段階では、少なくともスラヴ文学に関して言えば、クロアチアと比べても停滞が顕著であり、かつての文化遺産も民衆の間に浸透しているとは言い難い状況にあった。

クロアチアでも近代的な文章語の確立は多くの知識人にとって重要な課題となっており、一八三〇年代に始まる全般的な文化運動としての「民族再生」運動、いわゆるイリリア運動においても、その実現が主要な目標の一つとして掲げられていた。それによってスラヴ語の表現能力・可能性は飛躍的に高まり、独自の近代的な文学作品も誕生するようになったが、運動の過程で整備されていた文章語（標準語としてのクロアチア語）の体系は、ダルマチアではスラヴ語の知識人の間でさえ必ずしも全面的に受容されたわけではなかった。ダルマチアが中世クロアチア国家の中心地であったこと、そしてルネサンス期の古典文学がダルマチア（とくにドゥブロヴニク）で発達したことが、こうした運動におけるクロアチアの指導を忌避させた。教養階層の多くには、クロアチアとは異なるダルマチアの伝統的な綴字法や語彙に固執する傾向が見られた。⁽⁷⁾このことはスラヴ系住民のイタリア語からスラヴ語（現在のクロアチア語、セルビア語）への移行を阻害する要因となった。

一方、近代文学の発達という点では、スラヴ語による創作はようやく端緒についたばかりであり、小説『信仰と美』や詩集『火花』などの作

品で知られるニッコロ・トマゼオのようにイタリア語による創作が主流であった。当時イタリア諸邦では近代文学が開花しつつあり、幼年期をスプリットで過ごしたウーゴ・フォスコロのほか、ジャコモ・レオパルディ、ジュゼッペ・ジュステイ、アレッサンドロ・マンゾーニらロマン派世代の詩や小説がダルマチアにも教養階層にも多大な影響を及ぼし、その創作活動を刺激した。⁽⁸⁾イヴァン・クレリャノヴィチ・アルビノニ、ニコラ・ヤクシチ、ジュゼッペ・フェラーリ・クピリらの作品がその代表的なものである。⁽⁹⁾ただし、ダルマチアにおけるイタリア語の文学作品の多くは芸術性・創造性という点で必ずしも高く評価できるものではないことも指摘されており、⁽¹⁰⁾周辺のなものにとどまったと見るべきかもしれない。

二 リソルジメントとの関わり——カルボネリアを中心に——

前節で述べたように、ダルマチアには神学校以外に高等教育機関がなく、その知識人層は必ず外国に留学し、高等教育を受けていた。伝統的にイタリア諸邦への留学生が多かったが、とりわけオーストリアの支配下にあるヴェネツィア州内のパドヴァ大学がその中心となった。パドヴァ大学だけでも五〇名程度のスラヴ人留学生が在籍していたとされる。⁽¹¹⁾これらの留学生は現地で進行中のイタリア統一運動、いわゆるリソルジメントに感化されながら、その進歩的思想、とりわけオーストリアの圧政に抵抗する手段としてのリベラリズムとナシヨナリズムを学んだと考えられる。⁽¹²⁾

中世以来、多くの都市共和国や小君主国、そして教皇国家に分裂し、強力な統合の中心を欠いていたイタリア半島にリソルジメントの動きがあらわれるのは、フランス革命前後のことであった。ナポレオンの支配下でイタリア王国（ただしイタリア全土を含むわけではない）が結成されたが、「イリリア諸州」同様、体制そのものに対する不満は多かつたし、ごく短期間で崩壊してしまった。

ウィーン会議後、ヴェネツィア、ジェノヴァなどの都市共和国は全廃され、小君主国の統廃合も実施されたが、諸邦の分裂状態は必ずしも改善されなかった。半島北部には三つの勢力が存在した。第一にオーストリア直轄のロンバルディア・ヴェネツィア王国およびトスカナ、パルマ、モデナなどオーストリア系の小君主国であり、第二にピエモンテ、サヴォイア、リグリア（ジェノヴァ）などを併せ持つサルデーニャ王国、そして第三にローマを中心に広大な領域を支配する教皇国家である。また半島南部はほぼ全域がナポリを首都とする両シチリア王国の支配下に置かれた。いまやダルマチアとヴェネツィアは行政区分上は完全に切り離された。

ウィーン体制の下で、イタリア諸邦でも反動的な復古王政が導入された。その政治的弾圧の下で、「スプリミ・マエストリ・ペルフェツティ」や「カルボネリア」に代表される秘密結社の簇生を見ることとなる。これらはいずれも憲法制定や政治・社会の民主化・近代化の要求を掲げて反政府的活動に従事しており、前者は「土地均分制にもとづく一種の共産社会」を、後者は「農地均分法を軸とする社会的平等の達成と

民主共和国の形成」を最終的な目標として掲げていた。⁽¹³⁾

こうした秘密結社のなかでも、カルボネリアはナポレオン戦争末期にイギリス軍に占領されていたヴィス島を経由してダルマチアに伝わり、ザダル、シベニク、スプリット、マカルスカ、ドゥブロヴニク、コルチュラ、コトルなど主要都市で多くの支持者を獲得した。⁽¹⁴⁾ ヴィス島はすでにフランス占領期からマツソネリア（フリーメーソン）の存在で知られており、またザダルやスプリットには「ゲエルフィ」「チンクエ」などの結社が存在し、イタリア本土のカルボネリアとも接触を持っていた。これらの結社には、カトリックの聖堂参事会員など教会関係者が少なからず参加したことが知られているが、その多くはイタリア系住民であった。オーストリアからの「解放」による国家再興を求めるドゥブロヴニクの事例を除けば、スラヴ系住民の間ではカルボネリアをはじめとする秘密結社の運動への関心の度合は概して低かったとされている。⁽¹⁵⁾

結局、これらの秘密結社は警察当局の厳しい監視と弾圧によって行動の自由を奪われ、とくにカルボネリアに率いられたナポリ革命を嚆矢としてイタリア各地が一種の騒乱状態に陥った一八二〇年前後には、大規模な検挙の対象となった。のちにダルマチアにおける「民族再生」運動の有力な指導者の一人となるステイエバン・イヴィチエヴィチもカルボネリア参加の嫌疑で投獄されている。⁽¹⁶⁾ なお、この時期にナポリに続いてピエモンテ、モデナ、教皇国家北部（ロマーニャ地方）などで立憲的改革の試みがなされたが、近視眼的政策と指導力の欠如によって、いずれも短命に終わった。

従来の秘密結社が全イタリア的な視点を欠き、独自の国家理念・国民理念を提示することがなかったのに対して、一八三〇年代初頭にジュゼッペ・マッツイーニらが結成した「青年イタリア」は、「イタリアが一つの国民たるべく運命づけられている」という立場から出発し、機関誌『青年イタリア』（一八三三年創刊）を通じて、共和主義の理想と「民族」復興、イタリア統一国家の樹立を主張した。「青年イタリア」によって、リソルジメントは第二の局面に入った。

ここでイタリアの国家理念・国民理念が明確化されていくが、それはダルマチアの帰属問題をも生じさせることになった。マッツイーニ自身はほぼ現在のイタリア・スロヴェニア（旧ユーゴスラヴィア）国境に近いソチャ川を国境として想定し、スラヴ人が圧倒的多数を占めるアドリア海の対岸をイタリア統一国家から除外していた。⁽¹⁸⁾ マッツイーニはクロアチアで発達しつつあった南スラヴ人の国家的・国民的統一をめざすイタリア運動に同情的であり、イタリア統一国家の実現のために南スラヴ人との連合・共闘を志向していたとされる。⁽¹⁹⁾ 彼の論説「スラヴ民族運動について」⁽²⁰⁾からも、そうした態度が看取できる。しかし、その一方ではフィレンツェで刊行されていた雑誌『アントロジア』のコラム「イタリア人の植民地」においてダルマチアが取り上げられていたことに示されるように、コトル湾地方に至るダルマチア全域をイタリア領とみなす者も少なくなかったのである。⁽²¹⁾ 『イタリア人の道徳的・文化的優越』⁽²²⁾で知られるヴィンチェンツォ・ジョベルティの場合も、スラヴ人に対する共感を示す一方で、ダルマチアの海岸地帯をイタリアの一部とみなして

いた。⁽²³⁾

もつとも、ダルマチアのイタリア編入を支持する勢力は、少なくともダルマチアにおいてはごく少数派にすぎなかった。ダルマチアの知識人の中にはマッツイーニの立場を全面的に支持したトマゼオのようにリソルジメントを積極的に参加していく者もあつたが、⁽²⁴⁾ 少なくともイタリア王国が樹立される一八六〇年代まで、それはダルマチアを対象とするものではなく、現実的な課題として意識されていなかった。それは、あくまでイタリア諸邦の問題として理解されていたと考えられる。

とはいえ、リソルジメントとの関連において、ナシヨナリズムという発想が本来コスモポリタンのであつたダルマチアの知識人の間に浸透し、国家的・国民的統一という問題を意識させたことは、きわめて重要な意味を持っている。近代的な国民形成の契機が、そこに見いだせるからである。とくにスラヴ系の知識人にとっては、南スラヴ人の国家的・国民的統一を実現するための手本として、リソルジメントが大きな関心事となつていたことは事実である。旧ユーゴの歴史家ペトロヴィチは「ダルマチアの民族運動は土着のかつスラヴ的なものとして発達したのであり、リソルジメントの理念はその刺激となつた程度である」と述べているが、⁽²⁵⁾ より積極的な評価がなされてよいように思われる。なお、この時期のイタリア・ナシヨナリズムが南スラヴ人のナシヨナリズムと対立するものではなく、むしろ両者の協力・連帯が求められていたことは理解する必要がある。ダルマチア最初の本格的なスラヴ語雑誌であり、スラヴ系住民の「民族再生」運動の中心的メディアとしての役割を果たす『セルビ

『ダルマチア雑誌』および『ダルマチアの夜明け』が、かつてカルボネリアに参加し、「青年イタリア」の支持者でもあったといわれるバツタラ兄弟の経営するザダル随一の印刷所から刊行されたことから、両者の協力関係が伺える。⁽²⁶⁾ イタリア人と南スラヴ人、とくにクロアチア人の領土的野心の対立が顕在化し、ダルマチア住民の間に国家的・国民的統一をめぐる論争が生ずるのは、一八四八年革命期以降のことである。

ところで、実際の運動面では、「青年イタリア」は渺々しい成果を挙げることではできなかった。各地で武装蜂起が計画されたが、必ずしも広範な支持を得ているわけではなく、事前に発覚したり、実行されても短期間のうちに鎮圧された。むしろ、こうして失敗を繰り返すマツツィー二らの急進的な手法に批判的な勢力による穏和的改革路線が主流となっていく。それはオーストリアとの武力衝突を避けつつ、また共和政を志向することなく、イタリア諸邦君主の一致協力による連邦君主政の実現をめざすものであった。すでに触れたジョベルティの『イタリア人の道徳的・文化的優越』(二八四三)のほか、チェーザレ・バルボの『イタリアの希望』(二八四四)、マツシモ・ダゼーリオの『イタリア民族世論のプログラムに関する提案』(二八四七)などが、そうした立場を代弁する代表的著作となっている。彼らの間では、ジョベルティのようにローマ教皇のイニシアティブに期待するネオ・ゲルフィズモと呼ばれる立場と、バルボやダゼーリオのように世俗君主、とくにサルデーニヤ国王に期待するものがあり、この両者を念頭に置きながらイタリア統一運動が進展していくことになる。

むしろ、こうした動きにはダルマチアも無縁でいられるはずはなかった。ジョベルティ、バルボ、ダゼーリオらの著作は、ダルマチアの知識人の間でもよく読まれたという。そして、国家的再編が現実の課題となった一八四八年革命期において、彼らはイタリア諸邦の動向にあわせて重大な政治的選択を迫られることになるのである。

三 一八四八年革命期の諸問題 (一)

オーストリア支配下のロンバルディア・ヴェネツィア王国では、パリ二月革命以前から反体制運動が活発化していたが、帝都ウィーンで三月革命が勃発すると、ヴェネツィアが共和国として独立を宣言するに至った。ここでは、ヴェネツィア共和国との関係を中心に、イタリア諸邦の動きがダルマチア住民に及ぼした影響について検討していく。⁽²⁷⁾

すでに述べたように、この時期、イタリア地域はオーストリア支配下のロンバルディア・ヴェネツィア王国に加え、サルデーニヤ(ピエモンテ)王国、パルマ公国、モデナ公国、トスカナ大公国、教皇国家、両シチリア王国などに細分化されていた。これらの国々では一八四〇年代後半から政治的自由を求める運動が活発化しており、すでに一八四七年下半期にトスカナやサルデーニヤが諸改革の実施に踏み切っていた。

ロンバルディア・ヴェネツィアでは、まず外国支配からの解放が政治的目標として掲げられた。一八四八年一月一日、タバコ税の不払いを目的とする禁煙運動が起こり、州都ミラノは騒乱状態となった。まもなくパドヴァやパヴィアといった地方都市でも同様の事態が生じた。こうし

た事態に対処すべく、オーストリア当局はヴェネツィアの政治的指導者ダニエレ・マニンや前述のトマゼオなどを逮捕した。トマゼオはパリでの亡命生活を経て一八三九年にヴェネツィアに移住し、詩作・翻訳・文芸批評など文学活動に専念していたが、思想的には反オーストリア的立場を貫いており、危険人物とみなされていたのである。

こうした騒乱状態は、パリ二月革命、そしてウィーン三月革命の勃発により、いっそう激しいものとなった。三月十七日、蜂起した市民は拘禁中のマニンやトマゼオの釈放を要求し、これを実現させた。翌日には、ヴェネツィア議会が国民衛兵の創設を要求し、ヴェネツィア総督の承認を得た。この日、ヴェネツィア市内ではイタリア三色旗が掲げられ、教会の鐘が一斉に鳴り響いたという。こうした動きは憲法の公布を約束する皇帝の勅書によって一時的に鎮静化した⁽²⁸⁾が、ミラノの動き(三月十七日から二二日までの革命的反乱)に影響を受け、再び革命の気運が高まった。三月二二日には、マニンらが兵器廠を襲撃するとともに、市内の実権を掌握し、オーストリア軍の追放と共和政の樹立を宣言するに至った。

三月二三日、ヴェネツィアではマニンを首班とする臨時政府が発足したが、その閣僚の中にはダルマチアの誇る碩学トマゼオの姿があった(教育相)。こうした事態の推移に、もとよりイタリア諸邦の動向に対する関心が強かったダルマチアの知識人の間で、革命への参加者も見られるようになった。革命に心酔し、往時のヴェネツィア支配を理想化する者さえあったという。ダルマチアにおいても、この時期に各都市で反体制的な街頭デモがあり、ザダルとトロギルでは法務官が追放されたこ

と、スプリットで政治犯が釈放されたこと、ヴィスで市長が辞任に追いやられたことが確認されている。⁽²⁸⁾

ヴェネツィア臨時政府はすぐさまオーストリア軍と交戦状態に入り、数日中にヴェローナを除く旧ヴェネツィア共和国の全域を奪回した。復活したヴェネツィア共和国は、「聖マルコ共和国」とも呼ばれた。この時点から、ヴェネツィアとダルマチアとの接触が再開したのである。

三月二五日、臨時政府は、ダルマチア住民に対してヴェネツィア海軍への合流を呼びかけた。⁽²⁹⁾その後、公文書の形をとっていないものの、ヴェネツィア政府への協力とオーストリアに対する共闘を呼びかける文書が作成されるようになった。⁽³⁰⁾四月一日には、「君達はまず祖国のため義務を果たすべきである。オーストリアは君達の祖国ではない。君達がそちら側に残ったまま、同胞が自ら栄光を手に入れて、イタリアが解放されることを考えてみよ。敵が流す、我々にとって好ましくない虚偽の噂を信じてはいけない。我々は平静を保ち、自由で、希望を持ち続けよう。できるかぎり、そして速やかに君達の船でヴェネツィアに馳せ参じてほしい⁽³¹⁾」とする宣言が発せられている。

こうした呼びかけに対して、当時ヴェネツィアやトリエステを活動拠点としていたダルマチア出身者から積極的な支持が寄せられた。まず、三月二四日、スプリット出身のヴィンチェンツォ・ソリトロが、ダルマチア住民は数世紀にわたってヴェネツィアと結びつけられてきたのであり、すみやかに聖マルコの名の下に合併すべきであるとの宣言を行なった。⁽³²⁾また三月二七日付の『ガゼッタ・デイ・ヴェネツィア』紙上で、ドゥッ

ロヴニク出身のフェデリコ・セイスミトドールダが「ヴェネツィア人よ、かつての栄光の時代に、あなたがたはダルマチア人の兄弟であった。今日、さらなる栄光が我々に約束されている新たな時代にも、そうであってほしい。ダルマチア人は強固な愛情でそれに応えるものと確信する」⁽³³⁾と述べている。この他にも個人的にヴェネツィア支持を表明したダルマチア出身者は少なくないが、彼らの多くはすでにイタリア諸邦に定住し、ダルマチアを活動拠点としていなかったから、その影響力も限られていたであろうことには留意する必要があるだろう。

オーストリア政府は、ヴェネツィア共和国の樹立に伴うダルマチアの動きを注意深く監視していた。ザダル警察署長ガエタノ・クリスピは、ウィーン三月革命が起こる以前から頻繁にダルマチアの治安状況で、ウィーンの内務省に報告していたが、とくに三月二九日付の報告書では、ダルマチアの州都ザダルにおけるヴェネツィア革命の影響を詳細に伝えている。⁽³⁴⁾

この数日、ダルマチアがハンガリーあるいはクロアチアに合併されるのではないかと噂が広まっている。人々は、そのようなことになれば、この地方、とりわけザダルは多くのものを失うことになるだろうと声高に叫んでいる。(中略)人々は憚ることなくイタリアへの親近感を示している。彼らはハンガリーやクロアチアに吸収されるよりも、イタリアと連合したほうが有益だと考えているようである。

ザダル市は住民の過半数がイタリア語話者であり、その意味ではダルマチアにおいて例外的な存在である。しかし、この報告に見られる住民の親イタリア的態度、とりわけイタリアとの連合まで視野に入れていたという証言は興味深い。

この点でも注目されるのが、新聞・雑誌記事(とくに『ガゼッタ・デイ・ヴェネツィア』紙)や私信は別として、この時期にダルマチアのコミューンが発行した公文書にヴェネツィアへの支持が伺えるものがないことである。

この時期、クロアチア各地からダルマチアの各コミューンに対して合併(クロアチアへの併合)の呼びかけがなされており、それを拒否する根拠として、ダルマチアのイタリア的特質を強調する文書は数多く残されている。例えばスプリットの場合、公私を問わず日常的に用いられる言語はイタリア語であり、市民の多くがスラヴ語を理解できないと述べたうえで、「ダルマチアは少しもスラヴ的ではない」と結論づけている。⁽³⁵⁾ それにもかかわらず、同じような文書がヴェネツィアの呼びかけに呼応する形で作成された形跡はないのである。この事実、ダルマチアにおける親イタリア派が必ずしもヴェネツィアとの合併推進派というわけではなく、少なくともそうした立場が多数派を占めるには至らなかったことを示すものであろう。むしろオーストリア当局への警戒心があったことは否めないし、公文書である以上、慎重かつ待機主義的な立場をとるのが一般的であるにしても、それだけではなからう。多くのコ

ミューンがハンガリー（クロアチア）との合併を望んでいなかったことは事実であるが、まだ完全に成功したわけではないヴェネツィアの革命運動に加担するという危険を冒してまで、ようやく立憲制に移行し、安定期を迎えるかに見えたオーストリアから分離・独立する意思はなかったと考えるのが妥当であろう。もとよりコミューンの決定はオーストリア政府と密接に結びついた寡頭的支配層の意思そのものであった。その多くはイタリア語やイタリア文化への執着を示していたかも知れないが、このことを現実の政治的・軍事的展開と安易に関連づけるべきではなからう。結局、ダルマチアの寡頭的支配層にとって、一定の自治が認められ、政府に従順であれば政治的・経済的権益を確保できる現状維持こそが最善の選択であったのではないだろうか。

そうした事情は、ヴェネツィア政府も理解していなかったわけではなく、冷静な分析・判断を行っていた。例えば、トマゼオは五月一五日付の書簡の中で、次のように述べている。⁽³⁶⁾

ダルマチアについては、何もわからない。ダルマチア人に対しては、平静を保つよう訴えてきた。目下、我々は彼らを助けてやることはできないし、彼ら自身が自らを解放することも不可能だからである。ダルマチアはイタリア人のものとなるべきか、スラヴ人のものとなるべきか。それは難しい問題だ。私の考えでは、いまイタリアが解放されるのであれば、イタリア人のものとなるべきであろう。スラヴ人のものになるのは、そのあとでよい。

また、同じトマゼオの七月一日付の書簡には、次のようなくだりがある。⁽³⁷⁾

ダルマチアの状況は混沌としている。我々の世代のうちに、それが整理されることはないかも知れない。二つの言語、二つの宗教が統一と調和と勢力拡大の大きな障害となっている。ダルマチアは、なおイタリアと結びつけられるべきであるように思われる。スラヴ的部分は大きいものの、自己覚醒の段階に至っていないからである。ダルマチアがクロアチアと合併しても、得るものはわずかであろう。しかし、ボスニア・ヘルツェゴヴィナと一体化するのであれば、ダルマチアはイタリアから離れることができ、単一の言語を話せるようになるかも知れない。

そこでは、ダルマチアのヴェネツィアへの併合は、住民の意向を実現するものというより、先覚者たるイタリア人のなすべき使命であるように描かれている。まず住民の教化が必要であり、そのためにこそイタリアとの連合が望ましいと論じられているのである。歴史的共通性を根拠とする浅薄な感情論に陥っていないことで、同種の文書とは一線を画すものとなっている。

四 一八四八年革命期の諸問題 (二)

その間も、イタリア諸邦ではサルデーニャ(ピエモンテ)王国を軸に統一への動きが強まっていた。サルデーニャ軍はすでに三月二五日にロンバルディアに侵攻し、各地を「解放」していった。パルマ、モデナを含めて、これらの「解放」地区では、五月から七月にかけて住民投票が実施され、サルデーニャ王国への即時合併を宣言した。発足したばかりのヴェネツィア共和国も、一八四八年七月四日、これに追従することを余儀なくされたのである。

しかし、ほぼ同じ時期に、オーストリア側の反攻も始まっていた。オーストリア軍は本国から援軍を得て、まず旧ヴェネツィア領内の諸都市を奪回し、続いて七月二五日にはヴェローナ西郊のクストーザの戦いでサルデーニャ軍を撃破した。サルデーニャ軍はロンバルディアを放棄し、八月六日、オーストリア軍がミラノに再入城するのを許した。こうして革命の趨勢はほぼ決定づけられたが、ヴェネツィア議会はサルデーニャ王国との合併決議を撤回し、マニンを独裁官に任じて、ヴェネツィア市周辺にまで領土を減らしながらも、なおも独立共和国として激しい抵抗を続けた。

兵力を補充するため、ヴェネツィア政府はふたたびダルマチア住民に志願兵として独立戦争に参加するよう呼びかけた。一月一四日、「まだイタリア独立の旗の下に戦っていないダルマチア⁽³⁸⁾イストリアの青年に告ぐ」と題する以下の内容の宣言が発せられた。

イストリアもダルマチア沿岸部もゲルマン人やスラヴ人のものではないし、将来的にも決してそうなるはずがない。自然、その政治的変遷の歴史、言語、信仰、習慣が、それを許さない。美しいイタリアの国土はアドリア海のこちら側で終わるのではなく、その対岸にまで広がっている。アルプス山脈は文明化されたイタリア、イストリア、ダルマチアの国土を蛮族から分け隔てるように自然が設けた障壁なのだ。だから、ためらわずに、できるだけ数多く、イタリアの聖なる戦いの旗の下に馳せ参じてほしい。それによってイストリアとダルマチアも解放されるのだ。

しかし、少なくともダルマチアに関しては、この呼びかけはまたも失敗に終わった。一月九日、ダルマチア⁽³⁹⁾イストリア軍団が結成されたが、実際に軍団に参加したダルマチア出身者はわずか八名にすぎなかったのである(ザダル、スプリット、コトルから各二名、ドゥブロヴニク、ストンから各一名)。しかも、この軍団自体が、将校三名、下士官三名、兵士六七名というアンバランスな編成であった。結局、この軍団はほとんど戦場で活躍することなく、一八四九年五月一〇日に解散した。また、ヴェネツィア共和国自体、八月二二日にオーストリア軍に降伏を余儀なくされ、イタリアにおける革命運動は完全に終結した。

結局、ダルマチア住民がイタリアでの革命運動、とくにヴェネツィア共和国の動きに示した関心の度合は、必ずしも高くはなかったと思われる。

る。それは、不成功に終わったダルマチア・イストリア軍団の事例からもわかる。ダルマチア住民の多くは、反オーストリア的である場合でも、かつての支配者であるヴェネツィアへの忠誠心を持ち合わせてはいなかった。もともと、ダルマチアのスラヴ的特質を否定するヴェネツィア側のプロパガンダが一定の成果を上げたことは確かである。それはクロアチアとの合併を拒絶し、ダルマチアの自治的地位の保持・拡大をめざす運動に結びつくことになる。

むすびにかえて

これまで、一九世紀前半のダルマチアにおけるイタリア・ナショナリズムの政治的・思想的影響について、カルボネリアとの関わりや一八四八年革命期の諸問題、とりわけヴェネツィアとの合併問題を中心に考察してきた。ダルマチアの知識人たちがイタリア・ナショナリズムの影響を強く受けながらも、必ずしもイタリア統一運動に参加していったわけではなく、そこから自らの国民統合過程を推進する手法を学んでいったことが明らかにされた。国民統合の方向性はなお定まらず、「ダルマチア国民」をめざす自治主義と「ユーゴスラヴィア国民」をめざす南スラヴ統一主義、さらに個別のクロアチア・ナショナリズムやイタリア・ナショナリズムなどが唱導され、むしろ社会の分裂状況が顕在化することとなるが、この問題については別の機会に扱うこととしたい。本稿では基本的な構造を描き出すことにとめたが、イタリア側の史料を十分に使いこなしておらず、また紙幅の都合もあつて緻密な分析には至らな

かった。国民統合イデオロギーの形成と国民意識の定着という問題を含めて、さらなる研究の深化と視野の拡大が今後の課題である。

注

- (1) E. A. Freeman, *The Historical Geography of Europe*, 3rd edition, 1903, p. 115. S・クリソルド編(田中一生・柴宜弘・高田敏明訳)『ユーゴスラヴィア史』恒文社、一九八〇、五四頁に引用されている。
- (2) Nikša Stanić, *Hrvatska nacionalna ideologija preporodnog pokreta u Dalmaciji* (*Mihovil Paulinović i njegov krug do 1869*), Zagreb, 1980, p. 23.
- (3) 北原敦氏は、「リソルジメントは再興あるいは復興という意味で、かつてのイタリアの繁栄と栄光を一九世紀によりみがえらせようとする希望を表している」一方で、「国家統一の問題はリソルジメントの一部を構成しているにすぎず、そのすべてを表しているのではない」として、従来の「国家統一運動」としての叙述にかわる新たな分析手法の必要性を説いている(谷川稔・北原敦・鈴木健夫・村岡健次『近代ヨーロッパの情熱と苦悩』(世界の歴史二二)中央公論社、一九九九、二六〇頁)。リソルジメント研究は日本でも多くの論争を伴いつつ発展してきたのであり、なお「定説」化していない部分も多いようであるが、本稿の主題から外れるので、これらが提示してきたもともとの基本的な枠組を紹介するにとどめる。詳しくは、北原敦「リソルジメントと統一国家の成立」『岩波講座世界歴史二〇』(岩波書店、一九七二)、黒須純一郎『イタリア社会思想史』(御茶の水書房、一九九七)、森田鉄郎『イタリア民族革命・リソルジメントの世紀』(近藤出版社、一九七六)、村上信一郎「マッツイーニの

- 敵——イタリアにおける民族統一論と連邦論——」阪上孝編『1848年国家統一と民衆』（ミネルヴァ書房、一九八五）等を参照。
- (4) Luigi Serragli, *Statistica generale della Dalmazia edita dalla Giunta provinciale, divisione IV, popolazione*, Zadar, 1962, p. 144.
- (5) Dinko Foretić, "O etničkom sastavu sinovništva Dalmacije u XIX stoljeću s posebnim osvrtom na stovništvo talijanske narodnosti," Dinko Foretić, ed., *Dalmacija 1870*, Zadar, 1972, pp. 77-78.
- (6) イタリア語は一九二二年の「言語法」施行まで、ダルマチアの公用語としてスラヴ語（クロアチア語・セルビア語）に優越する地位を保持した。Vjekoslav Maštrović, "Jezično pitanje u doba narodnog preporoda u Dalmaciji," Jakša Ravić, ed., *Hrvatski narodni preporod u Dalmaciji i Istri*, Zagreb, 1969, pp. 235, 240-241.
- (7) Zlatko Vince, "Pravopisno jezična previranja u Dalmaciji prije 1860," *Radovi Instituta JAZU u Zadru*, 8, Zadar, 1961, pp. 263-294; Dalibor Brozović, "O gramatičkim pitanjima u hrvatskome narodnom preporodu," *Zadarska revija*, 4-5, Zadar, 1987, pp. 335-344.
- (8) Rade Petrović, *Nacionalna pitanje u Dalmaciji u XIX stoljeću*, Sarajevo, 1968, p. 108.
- (9) Glorija Rabac-Čondrić, "Odras risorgimentalno - preporoditeljskih ideja na zadarske pisce," *Zadarska revija*, 4-5, Zadar, 1987, pp. 421-429. トマナーニ＝クベリは文学史家でもあり、同時代のダルマチアの文学的状况を知る上で貴重な著作を残している (Giuseppe Ferrari-Cupilli, *Cenni biografici di alcuni uomini illustri della Dalmazia*, Zadar, 1887等)。
- (10) Mate Zorić, "Romanički pisci u Dalmaciji na talijanskom jeziku," *Rad JAZU*, 357, Zagreb, 1971, p. 469.
- (11) Bernard Stulli, "Tršćanski > Favilla < i južni Slaveni," *Anali Jadranskog instituta*, 1, Zagreb, 1956, p. 42.
- (12) Rade Petrović, *Op. Cit.*, p. 106.
- (13) 森田鉄郎編『イタリア史』（世界各国史一五）山川出版社、一九七六、二二六四～二六九頁。
- (14) ダルマチアにおけるカルボネリアなど秘密結社の動向については、Andrea Ostojca, "La carboneria e le sette segrete in Dalmazia e in Istria (1813-1824)," *Atti e memorie della Società dalmata di storia patria*, VII, Roma, 1970, pp. 5-224; Stjepo Obad, "O karbonarima u Dalmaciji," *Zadarska revija*, 1, Zadar, 1975, pp. 96-99等参照。
- (15) Giuseppe Praga, *History of Dalmatia*, Pisa, 1993, p. 221.
- (16) Radovan Vidović, "Doprinos Stjepana Ivčevića u kulturnim nastojanjima dalmatinskih preporoditelja," *Radovi Instituta JAZU u Zadru*, 8, Zadar, 1961, p. 184.
- (17) 森田鉄郎編『前掲書』二一八八頁。
- (18) Giovanni Mazzini, *Dužnosti čovjeka*, Zagreb, 1922, p. 114.
- (19) Mate Zorić, "Talijansko-jugoslavenski odnosi. Talijanski pisci o južno-slavenskim narodima," *Enciklopedija Jugoslavije*, vol. 8, Zagreb, 1971, p. 305.
- (20) Giuseppe Mazzini, "On the Slavonian Movement," *Lowe's Edinburgh Magazine*,

1848. Ibid., "Del moto nazionale slavo." *Italia del popolo*, 1848.
- ⑫ Ferdo Šišić, *Predratna politika Italije i postanak Londonskog pakta (1870-1915)*, Split, 1933, p. 16.
- ⑬ Vincenzo Gioberti, *Del primato morale e civile degli Italiani*, Bruxelles, 1843.
- ⑭ Mate Zorić, "Talijsansko-jugoslavenski odnosi," p. 305.
- ⑮ エドヤホ (一八〇二〜二〇三) はタルトチアのシンビク出身。スラヤホの田中博士が、パドヴァで学び、フレンシヤホエッセニアで大学卒業後、ハヤヅリシムリスムエタリア・ナシヨナリスムに専攻し、博士。Emmy Haertel, "Nicolo Tommaseo, der Vermittler zwischen lateinischem und slavischem Genius," *Jahrbücher für Kultur und Geschichte der Slaven (Zeitschrift des Osterreichisch-Instituts Breslau)*, N. F. Bd. XI, Wroclaw, 1935, pp. 269-279; Ivan Katusić, *Vjечно progovorno Nikole Tommaseo*, Zagreb, 1975; Marija Pirjevec, *Niccolo Tommaseo tra Italia e Slavina*, Venezia, 1977; Vittore Branca et al. ed., *Niccolo Tommaseo nel Centenario della morte*, Firenze, 1977; Giannantonio Paladini et al., "Niccolo Tommaseo," Francesco Semi et al. ed., *Istria e Dalmazia. Lomini e tempi* 2, *Dalmazia*, Udine, 1993, pp. 353-383. 参照。
- ⑯ Rade Petrović, *Op. Cit.*, p. 110.
- ⑰ Giuseppe Praga, *Op. Cit.*, pp. 223-224.
- ⑱ エドの博士題名は 'Grga Novak, "Dalmacija na raskršću 1848. godine," *Rad JAZU*, 274, Zagreb, 1948, pp. 132-139 (Italija i obnovljena Mijetacka Republika i Dalmacija 1848. g. do ujedinjenja Venecije s Piemontom), pp. 218-227 (Venecija i Dalmacija u drugoj polovini 1848. godine i u 1849. godini); Grga Novak, "Maninova vlada: Nacionalni komitet i Garibardinci u odnosu na Dalmaciju," *Zbornik Historijskog instituta JAZU*, 3, Zagreb, 1960, pp. 23-58. 参照。
- ⑲ Grga Novak, "Dalmacija na raskršću," p. 91.
- ⑳ *Bullettino ufficiale degli atti legislativi del governo provvisorio della Repubblica Veneta dal 22 marzo 1848 al 4 luglio 1848*, Venezia, 1848.
- ㉑ *Raccolta per ordine cronologico di tutti gli atti, decreti, nomine ecc. del Governo provvisorio di Venezia*, I, Venezia, 1848, p. 241.
- ㉒ Ibid., p. 319.
- ㉓ Ibid., p. 224.
- ㉔ *Gazzetta di Venezia*, Venezia, 27. III. 1848.
- ㉕ Allgemeines Verwaltungsarchiv Wien, Ministerium des Innern, 2, 204/1848;
- ㉖ Stjepo Obad, *Dalmacija revolucionarne 1848/49. godine*, Rijeka, 1987, pp. 69-71.
- ㉗ Hrvatski državni arhiv, Križevačka županija, fasc. 427, br. 649; Stjepo Obad, *Dalmacija revolucionarne 1848/49. godine*, pp. 128-129.
- ㉘ Arhivo Correr (Venezia), Tommaseo, Venezia, Italia ed Europa, II, 184; Grga Novak, "Dalmacija na raskršću," p. 138.
- ㉙ Arhivo Correr (Venezia), Tommaseo, Venezia, Italia ed Europa, IV, 475-476; Grga Novak, "Dalmacija na raskršću," pp. 138-139.
- ㉚ *Raccolta per ordine cronologico di tutti gli atti, decreti, nomine ecc. del Governo provvisorio di Venezia*, I. V., Venezia, 1848, p. 116.
- ㉛ Grga Novak, "Dalmacija na raskršću," p. 219.